ガンからの生還

奇跡に挑む人々

●ガンに勝つ六七の療法●あなたの命を救う名医九九人＋名病院一八八

ガンに勝った人間を記録する特別取材班

宗肖之介

無検印承認

ガンからの生還 ―奇跡に挑んだ人々―
著　者＝宗　肖之介
発行者＝土井　勇
発行所＝株式会社　青樹社
東京都千代田区三崎町二―六―七　郵便番号一〇一
電話東京二六四―六九〇二・二六四―六九〇四　振替東京四七六四八
印刷所＝有限会社　八光印刷
製本所＝土開製本株式会社
落丁・乱丁本はお取り替え致します

◆定価・発行日はカバーに表示してあります

●ガンに勝つ六七の療法●あなたの命を救う名医九九人＋名病院一八八

奇跡に挑む人々

ガンからの生還

ガンに勝った人間を記録する特別取材班

宗肖之介

I313.55
J487

埼玉県立図書館
埼玉県立図書館
1155054 8

りながらそこには生があり、生の中に死さえも包括する。その意味でこの人たちは「ガン・イコール・死」の定義を身をもって否定してみせた現代の語部であり、貴重な生き証人といってよいだろう。

また、これら〝名誉ある〟証言者には、全員にまたがる一つの共通項があって、それは決してガンなどには負けないという鞏固で不屈な精神力であり、生への滾る執着であった。そして、証言者たちに、力む強い口調はむしろすくなく、淡々とした語り口の裡に、そうした意思が垣間見えていたのが目立った。

さらに人間の生きざまとは、所詮、孤独なものではあっても、その個体が病に弱っているとき、なんらかの支えがそこにあるのと無いのとでは、はなはだしく大きな隔りが生じるのだと改めて感じさせられもした。

たとえそれが生還を期したときには、負担以外のなにものでもあり得なかったとしても、〝死者になれない側の論理〟を持つとき、人は予想外の復原力さえ発揮するものではあるらしい。

人類がガンに打ち勝つ——つまり「ガン克服元年」がいつになるにせよ、この証言者たちの言葉は、すくなくともいまが〝前夜〟であることを確かに物語っていると言えるのではないか……。

宗　肖之介

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

まえがき……2
第一章 戦った、そして勝った……9
死を恐れるな！（上顎ガン）……11
絶望の孤立から集団の闘いへ（膀胱ガン）……33
喉頭全摘出、私の声を聞け！（喉頭ガン）……45
ガンに挑戦する父の執念（骨肉腫）……57
毎日が死の恐怖で（子宮頸ガン）……62
誤診？　絶望からの生還（喉頭ガン）……70
再発、ガン病棟からの脱出（舌ガン）……76

果てなき苦悶の日々……（耳下腺ガン）……83
不要になった遺書（乳ガン）……89
健康自慢の私が……（肺ガン）……95
自分の気持ちに素直に（乳ガン）……103
33歳の厄年に宣告！（胃ガン）……111
私は二回生きた！（耳下腺ガン）……117
お母さん、私たちは勝ったのね（小児ガン）……122
「感謝の気持ち」に生きる（喉頭ガン）……128
あなたはあと一年の命です（肺ガン）……133
声を失った高校教師（喉頭ガン）……140

私はガンと対決する！（膀胱ガン）……149
第二の人生を歩む私（子宮ガン）……155
ガン患者のボランティア活動（乳ガン）……166
手をつなぐガン患者たち（膀胱ガン）……173
ガンは業病でない（子宮ガン）……176
夫婦ふたりきりの闘い（肉腫、乳ガン）……182
医師にガンだと宣告されて（膀胱ガン）……192
夫との別離、両親との死別（直腸ガン）……195

第二章　ガンに勝つ、67の療法

……207

和漢療法……209／物理療法……228
放射線療法……246／免疫療法……247
第三章　あなたの命を救う
ガンの名病院188＋名医99人……257
第四章　恐怖の発ガン物質……279
これが危ない！　新しいガンの可能性……281
発ガン物質最新情報……283
あとがき……287

第一章
戦った、そして勝った

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

▼上顎ガン

死を恐れるな！

丹羽小弥太　六十歳
駒沢大学教授、評論家
東京都千代田区外神田一～十六～一～五一四
電話　〇三―二五三―八〇七四

昭和三十九年の暮れ、当時食道ガンで国立ガンセンターに入院中だった作家の高見順氏の詩集『死の淵より』に贈られた野間文芸賞の授賞式に、丹羽小弥太氏は出席した。

〝さいごの文士〟高見順は、三年間にわたる闘病生活の後、昭和四十年八月十七日、ついに不帰の人となったが、闘病中にあっても六十篇あまりの詩を書きつづけたこの不屈の作家を、終始、敬愛してやまなかった丹羽氏自身が、高見順の死後四年を経ずして、皮肉にもその同じガンに冒され、さらに苛酷なガンとの闘いを展開することになったのだった――。

その当時の丹羽小弥太氏は、駒沢大学教授として大学で教鞭をとるかたわら、科学評論家とし

てもマスコミをはじめとする各方面で大活躍中の身であった。昭和四十四年春、そんないわば人生の絶頂期にあった五十二歳の丹羽氏を、口腔にできた、たった一つの腫れものが、一挙に絶望のどん底に突き落とし、以後〝ガン病棟〟の囚われ人としての、長く、ほんとうに長く、苦しいガンとの闘いがはじまったのである。

いまから思えばあれがガンの自覚症状だったのでしょうか？

昭和四十三年の春頃、上顎の歯がぐらつき始め、固い食物は噛めなくなるし、すぐにでも歯医者にかかりたいところだったのですが、ちょうどその頃は、折り悪しく勤務先の駒沢大学でも学園紛争のピークに当たっていて、とてものんびりと歯の治療に通っていられるような状況ではなかったのです。

しかし、翌昭和四十四年の春になって、ようやく学園にも平常化路線が敷かれはじめ、大学にも一応の平穏が戻りました。そこでやっと歯の治療にもとりかかれることになり、知人に紹介された渋谷のT歯科医を訪れたのでした。

「舌の付け根のところにちいさな腫れものがありますね。これはひょっとすると歯の治療どころではないかもしれませんよ。一度、国立ガンセンターで精密検査を受けられたほうがいいですね」

私の口の中をのぞいた歯科医に、いきなりそう言われたのです。

のっけからガンセンターと言われて一瞬私の顔色が変わったのか、その歯科医は慌ててとり繕うよ

うに二、三言葉を付け加えながら、ガンセンターにいる知人の医師に電話をするため、診察室に私を残したまま、わざわざ私室まで足を運んだのです。あまりに意外な事の成り行きに呆然としていた私ですが、ふと我にかえって周囲を見まわすと、診察室にも電話があるのです。その電話を使わなかったということは、私には聞かせたくない内容なのにちがいない。そう気づいたとたんに、私の胸は早鐘のように鳴りだしました。

「三日後を予約しておきましたから、約束の日には必ず行ってください」

電話を終えて戻ってきた歯科医に、そう言って念を押されたのがズシンと重く胸に来たことを、今でもありありと憶えています。

歯科医にさえ一目でガンだと判るほどに進行しているのだとしたら、もうすでに手遅れではないのか……。湧き上がってくる不安に脅えながらも、一方ではガンの診断がそう簡単につくはずがない。この五十年間、病気らしい病気もなに一つしたことのないこの俺が、ガンなどであってたまるかと……必死にその不安を打ち消そうと努力したものでした。

しかし、その約束の三日後――五月十六日築地の国立ガンセンターへ出向いた私を、口腔科の鷲津邦雄医師のかわりに診てくれた耳鼻咽喉科の医師は、口の中をちょっと覗いただけで、

「すぐ入院して手術を受けてください」

と言うんです。

その診察には、ものの数分もかかりませんでした。あまりにもあっけない診断に、これは間違いな

くガンだ、と観念はしたものの、それでもまだ心の片隅では、めまぐるしく安心材料を探していました。

ところが、その医師から手渡された入院申込書の病名欄を見ると、なんと「口底C」の三文字が記されているではありませんか。この〝C〟は言うまでもなくCANCER（キャンサー）――つまりガンのことです。

口腔底ガン……！　幸か不幸か、基礎医学者でもあった私の知識は、すべてを読みとってしまったのでした。

その場で入院申し込みを済ませ、ガンセンターで研究員をしている友人を訪ねて、そのことを話した瞬間、友人はさっと顔色を変えて、急に用を思いついたからと、慌てて部屋から出ていってしまったのです。いかにもそれは本人がガンと知ってしまったからには、もうどうにも慰めようがないといった感じでした。

医師の宣告こそなかったものの、はっきりガンと判って、これから先どうやってこの死病と闘っていくのか、またこの事実を家族にどう話せばいいのか……という二重の重苦しい課題をかかえて、ガンセンターの玄関を出たその瞬間から、眼に見えるすべてのものが灰色一色に塗りこめられ、まるで荒涼とした原野を一人とぼとぼと歩いているようでした。

入院申込書には、緊急入院の要ありと記されていたものの、ガンセンターのベッドはなかなか空きません。従って、とり合えず通院で、術前のリニアク（リニア・アクセラレーター〈線型加速機〉――高圧エックス線を出す機械のこと）によるエックス線照射治療が、主治医の鷲津医師によって一

日おきに始められました。

しかし、五、六回つづけたころから副作用が現れはじめ、最初は身体がだるい、疲れやすいといった程度であったものが、次には喉が痛みだし、十回目頃になると喉の奥に三十本もの魚の大骨が突き刺っているような、激しい痛みに襲われるようになりました。こうなっては何を食べてもさっぱり味もわからず、コーヒーは泥水同然、アイスクリームはでん粉糊の練ったものを舐めているような感じなのです。

リニアクは計十四回、総線量三八〇〇レントゲンを照射して、始めてからちょうど一カ月後の六月二十日に終わりましたが、その頃には五十四キロあった体重が十二キロも減り、外来に出掛けてもソファに座っていることができず、長々と横になって順番を待つほどでした。その上、声も出なくなってしまったのです。

リニアクが終わると、次は制ガン剤のブレオマイシンを静脈注射で投与する治療が始められましたが、ブレオマイシンは私の場合、副作用が強すぎて、七回で中止せざるをえませんでした。とにかく手や足の指先が、まるでタラコのように赤くふくれ上がり、ちょっと物に触れても飛びあがるほど痛くて、このまま注射を続けると壊死を起こすということでした。

二つの術前治療が終わり、あとは手術を待つだけになりました。下顎と舌を切りとるという手術は、考えただけでも恐ろしいものでしたが、そのときはもう心身ともに憔悴しきっていて、一日でも早く入院したいと、ただそれだけを一心に願っていたものです。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo